

第三章 シビックで朝まで

東野圭吾

2021年12月11日

1

改札口かいさつぐちを出て腕時計うでどけいを見ると、二本にほんの針はりは午後8時半を少し過ぎたところを指していた。おかしいなと思い、周囲しゅういを見回した。案あんの定じょう、時刻表じこくひょうの上に取り付けられた時計は、八時四十五分を示している。浪矢貴之たかゆきは口元くちがを歪め、舌打ちした。オンボロ時計め、また狂くるってやがる。

大学の合格祝いで父親かもらった時計は、最近になって不意に止まる
ことが多くなった。